

と、能平または濃餅と書く。ぬっぺい、ぬっぺりなどの別名があるように、のっぺりとした汁だ。片栗粉か葛粉を加えて、どろっとさせた汁だ。それでこんな名がついたのである。

油揚げ、大根、はんじん、里芋、椎茸などを入れて汁を作り、味の付けをして、葛粉か片栗粉を水でいたものを入れ、とろりとさせたのがこのぬっぺいである。これも冬向きな精進料理で、体がよく温まると言われていた。

けんちめんものっぺいも、田舎くさい精進料理だと、現在ではあまり見向きもされないものになりつつあるが、いふりを聞くとこれら汁で箸を持ったとき、郷土の香りを満喫し、家庭の温かみを味あつたものだ。

(この項おわり)

【覚書】

鰯の大漁

昭和十一年秋、猿戸網代でのこと

賛助会員 安部弥右衛門

昭和三年の秋春、羽出浦の西野浦網代で、鰯の大群を包囲したことがあった。運悪くまた不手際も加つて、逃げられてしまったが、それから八年たつた昭和十一年の九月二十日(旧暦八月五日)、西野浦網代は猿戸網代で運よく、大がめ喰いの鰯千余尾を一網で漁獲して、永年待望の夢を達した。

前日十九日の朝、西野網が鰯焚入網の操業を終つて、沖合から帰つたら、情報がついてきた。「昨日、広浦網

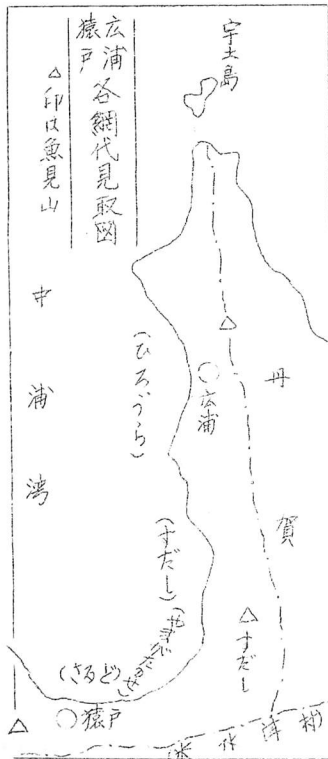
代に鰯の大群が現われた」といいうのである。

これを聞くと西野網は、大船に積んでいた鰯焚入網を浜辺に操り上げ、大急ぎで焚入網を船に積み込み、広浦網代に向つて漕ぎ出して行った。この日本浦網代は、西野網の本番であつた。

ところがこの日は、広浦網代には鰯は現れず、すぐ隣の猿戸網代に現れたが、この時本番の大我網はまだ出ていないので、広浦の山崎嘉吉さんの小鰯網で、鰯の群を包囲して、約二百尾を獲つたという。小鰯網で鰯二百尾とは、前代未聞の大漁である。

そこで大我網は、本番として定められた「分け前」とり、また二番網として網を入れてさらに何百尾かの鰯を送り、羽出浦の井野本利吉氏の廻船で大阪の魚市場に直送した。しかし酷い残暑のため途中品質を損じ、思いの外廉価で売却したとのことであつた。

明くれば八月五日(旧暦)、西野網は猿戸網代の本番であつた。その前夜は、親戚から贈られた祝酒を飲んで前祝の景気をつけたが、引き手連中は早朝から元氣一杯に集まり、さあ猿戸網代へと出かけようとしたところ、急にはげしい雨が降り出した。人々は、大事な日に雨降りかと、船出をためらつていた。そこは隣家の主人がや



つて来て、

「卯の刻(註、州け六、午苗六時)の雨は揚の相というから、今日は雨は絶対降らない、後はカンカン照りになる。」

という、聞いて人々は、喜び勇んで網船を乗り出した。

網元の御曹子克巳君は、その網船の後を小船で追うて、猿戸網代へ急ぐ途中、おひただしい鮎の大群に出逢った。

ちようちよと、そのころ、衣浦網代では、山崎嘉吉氏の小鮎網が鮎の大群を包囲し、夫が、網を巻き倒して逃げられた。その逃げた大群が、スタシ沖で、大渦巻を立てて暴れだした。見ていた老漁夫は「まるでイルカの千本突きをやる才を見るようだ」と叫ぶ。

猿戸網代に待機していた西戎網は、網船をスタシ網代にまわして、この鮎の大群を包囲しようとした。すると老練な猿戸の植松老人が

「それはいけない、この魚は必ず猿戸網代に入ってくるから、落ちついてここで待つがよい。」と力説する。

果して魚群は、猿戸向きに移動する。その魚群が山形に群をすざるのを見て、西戎網は海に網を入れた始末。

山形の魚見所でムラギン(老練な魚見)の叫ぶ声は山々にこだまし、打ち振る二枚の白團扇は、友を告げる蝶のよう。青葉の中にひるかえる。海では数十名の掛着が、一各に叫ぶ擡声。右と左に分れて魚群を包囲しようとか力漕する網船から、海面に投げる網を楫、その包圍網の中に

暴れくるう鮎の大群、壮快な大唸音が今度聞かされてくる。

真網(古手にまわる船)の大船が、猿戸網代の西側にある小嶋あたりに進む頃、魚群はずでにその前方を進んで行く。これを見て全裸の若者が数も海にとひ入り、魚群に向かつて泳ぎに泳ぎ、すると魚群は急に方向を転じ、今

来た方に引き返したが、この時逆網(註、まき網)はすでに海岸の磯に滑り落ちていた。魚群の逃げ道はなくなつたので、鮎の大群は網の中とはげしく暴れ狂うばかりである。

傾合いはよしと見夫ムラギン氏は、「ヨウソツ」と手をあぐれば、網船の壯者は「ヒーンエー」と叫ぶ声を出せる。時間の経過と共に、網は次第に海岸に引き寄せられる。

次に必要な網は、内引網の「イ子網」である。これと運ぶために小船が引出消に帰る途中、鮎を買いに来た伊豫の商船に出会ったので、これ幸いと今鮎漁のあつている旨を知らせ、魚場の猿戸までつれて帰って来た。

いよいよ魚群が海岸近くまで引き寄せたので、内引として丈夫なイ子網を内引に入れて、鮎の陸揚げにかかると、

第一回の内引網で浜に揚げた鮎は、大小合せて二百五十尾、次に揚じたのが三百尾位、内引網を使用すること八、九回、総数で千尾とほろかに越えたと伝えられた。

其の時の話を聞くと、岸近くまで引き寄せた鮎網の中を回遊する鮎の群は、内引網で次々と浜岸に引き揚がるのであるが、なに標百キロもある鮎が何百尾もはいつているので、暴れて跳ねとぶ力は恐ろしい程であり、大勢の壯者は海中へとび込んで、力を合せて浜に押しあげると、

待ちかまえていた壯者は、大きな磯のかぎで鮎の頭を打ちこみ、ある日は海水で頭部をさぐりつける。しばらくは悲惨な修羅場がくりひまげられる。

延置を終った鮎は一所所に集められ延置されるのであるが、この間に相当数の鮎が次々と姿を消す。それと公然とするものもあるが、こつそりと持ち去られるものもある。これらは大抵その場限りで、後に問題として残らない。

漁村の慣習である。

この日手船に乗って直接漁船の指揮に当り、鰯売渡の責任者であった西岡克巳氏に聞いたところでは、当日漁獲した鰯は、大小極々で、大きいので四〇キロ以上百キロまで二〇〇尾位。小さい分は一尾二〇キロから四〇キロ未満六四〇尾であり、其外八八尾増ったもの、また小さい分でも与えたもの一五〇尾、合せてこの日の漁獲は千尾を越えたといふ。

売却した分は、大きい分(四〇キロ以上)拾田、小さい分(四〇キロ未満)金参田五拾まで、伊予船の船頭に売却した。早速二隻の廻船に積んで、大阪方面に向けて出航したとのことである。

明治十七年、小倉側代でとれた鰯一尾が、金七銭也で取引されたことに驚きを感じていた私は、右の鰯一尾が三田五十五銭から十田までにも売れたのだ。これは豊年貧乏の姿でもあるうか。

ただし、これで「大かめ喰い」の鰯漁の夢は、実現したのであった。

余聞と二つばかり。

西戎網が猿戸網代で、内引き用のイ千網を使うが、引く度に網糸が切れるので、大引繩で芯急の補修をしよると、手近なある家の物置に西戎網の若主人がとび込んでたところ、土間に藪が一枚置いてある。何心なくはぐつて見ると、そこには、今とれたばかりの小鰯が三尾並べてあるではないか。これは多分浜に加勢に出ている人が、こゝそりと素早いことをやったのであるうと驚いたが、それをあえて問題にしないところが、漁村らしいところであるう。

ちようどこのとき、山口県の田舎所から私の義兄が女の子を一人つれて、久々に羽出浦に帰っていた。網親方

の西岡氏とは、生家と共にする従兄弟の間柄でもあつた。

夫またまその大漁の日であつた。

「今、猿戸で鰯をたくさん引き寄せている。すぐ見物に来ないか」と現場から迎えの船である。「そりや面白かう」といふので、女の子と私の家内も加わり、すぐその船に乗って現場に向かつた。

現場では次々に網を入れ、鰯を陸に揚げている壯觀で面白い限りなく、おまけに二、三十キロもある鰯を、義兄は三尾、私の家内も一尾もらつた。

その翌朝義兄は、そのうち二尾と及びけに山口県に帰つたが、家に帰りつくと早速町内の親戚も親交ある人々に便を出して、鰯の標子を伝えながら、巨大な鰯を示し、驚嘆している人々に鰯を切りさ、はきながら、次々と頒け与えた。夫だで貰つて帰つたという話、しかも千尾という大漁、半信半疑で見えていた人々もやつと納得し、珍らしい鰯の切身をもらつて花びながら帰つたという。それからしばらくは、九州東端は鶴見半島の鰯漁がことごと、裏目庄の田舎所、阿武郡徳佐の語り草となつたといふことであつた。

試みに、その時のことを日記帳に見ると、次のようにな書かれていた。

九月十九日 (前巻) 今日山崎嘉吉氏の小鰯網は、鰯百尾余、大漁の小引網は二百余り漁獲せりと。

九月二十日 (前巻) 西岡氏今日猿戸にて、鰯千尾余り漁獲す。売上げ五千田以上なり。

山口の義兄は三尾、利枝(妻の名前)は一尾貰つた。

時は支那事変(一八九四年)の直前で、経済界は不況の時代であつた。(おわり)